SALC で活動する大学院生スタッフのやりがいと学び
―多言語多文化イベントの企画運営に焦点を当てて―

Challenges and learning for graduate staff working at SALC: Focusing on their planning and management of multilingual /multicultural events

瀬井陽子，大阪大学

Yoko SEI, Osaka University

y-sei.ciee@osaka-u.ac.jp

安部麻矢，大阪大学

Maya ABE, Osaka University

mayabe.cme@osaka-u.ac.jp

孫聴雨，大阪大学

Tingyu SUN, Osaka University

著者について

瀬井陽子
専門は第二言語としての日本語教育。大学内の SALC で日本語学習アドバイザーとして従事し，留学生等へのアドバイジングを行うとともに，コーディネーターとしてスタッフの育成や施設運営を担当している。

安部麻矢
専門は言語学（特にタンザニアのバントゥ諸語）。大学内の SALC では多言語学習アドバイザーおよびコーディネーターとしてスタッフの育成や施設運営を担当している。

孫聴雨
OU マルチリンガルプラザの特任研究員を務め，現在は人文学研究科博士後期課程に在籍。専門は認知言語学であるが，日本語教育，言語の自律学習に興味を持っている。施設の運営に携わっている。

要旨

本稿は，多言語多文化学習支援を行う SALC でイベントを企画・進行する学生スタッフへのインタビューをもとに，スタッフとしてどのようにやりがいを感じ，学びを得たのかを報告するものである。まず，Center の概要と SALC の運営に学生が携わることの重要性，大学院生を雇用するティーチングアシスタント制度の課題，日本の SALC であまり多言語多文化を扱われていないことの問題を述べる。そのうえで，Center で実施している多言語多文化イベントについて説明し，運営に関わった大学院生スタッフへのインタビュー結果と考察を報告する。インタビューの結果から，多様な言語・文化的背景を持つスタッフ同士が協力することにより，イベント管理能力以外にも，自身の言語文化観への気づきや多言語多文化についての理解を深めるという新たな学びが起きていることが明らかになった。また， 多様な言語・文化的背景を持つスタッフ同士の協働でイベントを企画し進行するための工夫や，母語以外の言語でコミュニケーションをとったり発表したりする経験のように，院生としての，研究や教育の能力の向上につながる学びも得ていることが分かった。

キーワード：多言語多文化学習支援，SALC，大学院生スタッフ，TA/TF

Abstract

This paper is based on interviews with student staff who organize and facilitate events at a SALC that supports multilingual multicultural learning, and reports on how they found it challenging and learnt from their experiences as staff. First, the paper presents an overview of the Centre and the importance of student involvement in the management of SALCs, the issues of the teaching assistant system for employing graduate students, and the problems that not many Japanese SALCs deal with multilingualism and multiculturalism. Then, we report and discuss the multilingual multicultural events conducted at the Centre are described, and the results of interviews with the graduate student staff involved in the operation are reported and discussed. From the results of the interviews, it found that by cooperating with other staff members with diverse linguistic and cultural backgrounds, in addition to event management

skills, new learning occurred in terms of awareness of one's own linguistic and cultural perspectives and a deeper understanding of multilingual multiculturalism. It was also found that the staff members with diverse linguistic and cultural backgrounds learned from the experience of communicating and presenting in languages other than their mother tongue, and from the ingenuity of planning and organizing events in collaboration with other staff members with diverse linguistic and cultural backgrounds, which led to the improvement of their research and teaching skills as graduate students.

Keywords: multilingual multicultural learning support, SALC, graduate student staff, TA/TF

背景と概要

大阪大学で運営中の SALC（OU マルチリンガルプラザ：以下「プラザ」）は，2020 年 4 月より課外での自律的な多言語多文化学習を支援している。運営には，コーディネーターとして教員が中心となり携わっているが，大学院生スタッフ（ティーチングフェロー：以下 TF，ティーチングアシスタント：以下 TA，リサーチアシスタント）も主体的に運営に関わり，イベントやワークショップを企画・進行している。

SALC ではコーディネーターやアドバイザーに加えて彼らの存在も大きく，利用者立場が近いことから彼らのロールモデルになると考えられる。このような背景から，Kanduboda（2020）は，運営管理に携わる学生に焦点を当てたアクションリサーチを行い，学生らが，イベント管理，グループでの協働，コミュニケーション，広報，自律，粘り強さ，リーダーシップなどのスキルを習得したことを述べ，SALC の運営に学生スタッフが携わることの重要性を述べている。

SALC における大学院生スタッフの育成について，Hayashi and Wolanski（2021）は，TA 制度は優秀な大学院生に教員研修の機会が与えられることが期待されているにも関わらず，制度として発展せず，業務の多くが単純労働になってしまっている問題に対し，SALC で TA が主体的に運営する勉強会を企画した。その結果，TA らは対話型活動を進行し，教材を選択して準備するスキルを身につけ，SALC が大学院生スタッフに貴重な教育経験が提供できることを示唆した。

多言語多文化支援について，Thornton（2023）は，日本国内の外国語教育において英語が圧倒的優位性を有し，言語的多様性に焦点が当てられていないと指摘し，国内 27 カ所の SALC を対象に英語以外の言語の扱いについてのアンケートおよびインタビュー調査を実施した。その結果，半数以上の施設で英語以外の言語が扱えていない状況があるとし，SALC で実施可能なこととして，スタッフが話している多言語についての知識と経験を共有する機会を奨励することや，多言語を話すスタッフを積極的に採用することなどを提案している。

プラザでは，大学院生スタッフが多言語多文化イベントの企画運営に関わっている。そこで，これらの企画運営を通した大学院生スタッフの学びを知る目的でインタビューを実施した。本稿では，プラザの概要と多言語多文化イベントについて説明し，インタビュー結果と考察を報告する。

OU マルチリンガルプラザについて

大阪大学に 2020 年に開設されたプラザでは，課外での自律的な多言語多文化学習支援を行っている。大阪大学は 11 学部 10 研究科がある研究型総合大学で，学部生は約 15,000 名，大学院生は約 8,000 名，その内留学生が約 2,700 名である（大阪大学 2024）。専攻語として 25 の外国語を学ぶことができるという環境の下，プラザは国際性涵養教育の一環として，英語，日本語をはじめ多言語の自律的な学習支援を行うこと，留学生や外国人研究員と日本人学生とが多様な国際交流を図ることのできる環境を醸成することを目的に開設された。2024 年 8 月現在，豊中キャンパスと吹田キャンパスの 2 拠点で活動しており，以下のようなサービスを提供している。

・自習や勉強会を目的とした施設開放
・専攻語として学べる 25 言語に関する参考図書の配架
・ウェブサイトと SNS を通じた外国語学習に役立つ方法の発信
・言語学習ポートフォリオの発行，配布
・教員による言語学習アドバイジング
・教員による言語学習ポートフォリオワークショップ
・TA/TF の企画進行による言語学習および多文化理解に関するイベント開催
・TA/TF による会話練習パートナーとのセッション（英語・日本語・中国語・韓国語 1 セッション各 20 分）
・TA/TF による留学生等を対象とした日本語チュータリング

2024 年度の運営スタッフは，教員 2 名，大学院生スタッフ（TA/TF）19 名で，自律学習の促進と利用者が目標言語や文化への知識，理解を深めるための活動を実施している。各曜日 2 名の TA/TF が受付を担当し，曜日により，受付業務以外に，多言語多文化イベント，日本語学習のサポートを担当している。

イベントや学習サポートの担当については，スタッフの応募時の希望により割り振っている。また，TA/TF スタッフは採用時にプラザの運営理念や提供サービスなどに関するオリエンテーションを受ける。

多言語多文化イベントの運営

多言語多文化イベントは 2021 年 4 月より実施している。当初は COVID-19 の影響で，施設内での活動が制限されていたため，すべてオンラインでの開催であった。その後，対面とオンラインでのハイブリッド開催を経て，2022 年秋冬学期からは，対面で開催している。

イベントは，各学期期間中 3～4 回実施され，教員はコーディネーターとして加わり，多言語多文化イベント担当 TA/TF が 3～4 人で 1 つのチームとなり，企画運営を行っている。イベントは，まずミーティングで集まった TA/TF がテーマと内容を決め，その後各自が担当するスライドを準備し，告知用ポスターを作成し参加者を募り，昼休みの約 1 時間でイベントを実施する。翌週には企画者が振り返りのミーティングを行い，参加者アンケートも踏まえて次の企画を検討するという流れで行われる。表 1 が，これまでに実施したイベントである。なお「〇〇語で」と断りがあるイベント以外は，すべて日本語で進行している。

多言語多文化イベントの企画運営に従事する TA/TF は，約半数が留学生であることや，多言語学習経験，その言語圏への留学・滞在経験を持つ者が多いという背景から，学期ごとに企画チーム内で自分が得意なことや紹介したい内容を話し合い，テーマを決めている。これまでのイベントで紹介したのは，表 1 に示しているように，中国の各地域，ガーナ，ロシア，イタリアなど，特定の地域や言語に限らず，多様な文化を学ぶきっかけとなるようなものである。イベントは，昼休みに開催され，60 分～90 分で行われた。

イベントの進行は，写真 1 のように，TA/TF がスライドで説明をした後，ディスカッションを行うものもあれば，写真 2 のように，スライドでの説明の後，対象言語の会話練習を行うものもある。また，参加者が自身の多言語多文

化経験を話し，全体で情報を共有する場合もある。いずれの場合も，担当のTA/TF 全員で話題提供や進行などを分担している。

表 1

2021 年度から 2024 年度に実施した多言語多文化イベント

実施年度	イベント名
2021 年度（全てオンラインで実施）	・オンラインで中国を満喫しよう ・諺を通して世界を見よう！ ・世界のよもやま話 ・オンラインツアーに参加してみませんか？～ライブで中国旅行 ・オンラインでタンザニア・ザンジバルのビーチを散策しよう ・あなたもマルチリンガルになろう！ ・我が家の旧正月の過ごし方
2022 年度（対面実施・一部はオンラインのみ）	・世界の音楽を聴こう！ ・話してみよう！聞いてみよう！世界の不思議な風習 ・みんなで語ろう！私の言語学習 ・世界の料理を楽しもう! ・あなたもマルチリンガルになろう！ ・世界の料理を作ろう！
2023 年度（対面実施）	・世界の屋台グルメを楽しもう！ ・アジアを旅しよう！ ・世界のお菓子大集合！ ・英語で「人生ゲーム」をしてみよう ・世界のお茶を飲んでみよう！ ・中国の食文化を知ってみよう！

	・世界のゲームで遊んでみよう！
2024 年度　春 夏学期 （対面実施）	・関西で世界の料理を食べてみよう！ ・世界の料理を知ってみよう！ ・あなたもマルチリンガルになろう！ ・世界のお菓子大集合！

写真 1　「関西で世界の料理を食べてみよう！」の様子

写真 2　「あなたもマルチリンガルになろう！」の様子

大学院生スタッフの経験

前述の通り，プラザでは TA/TF が多言語多文化学習支援に関わっているが，運営スタッフはプラザの活動にどのように参加し，活動から何を学んでいるのだろうか。また，イベントを企画し運営するスタッフとしてのやりがいや難しさはどのようなものだろうか。これらを明らかにするために，オンライン会議システム（Zoom）にて TA/TF4 名にインタビューを実施した。

インタビューの質問項目は以下の 8 項目である。

・言語の能力について教えてください。
・これまでのプラザの活動で，一番心に残っている活動は何ですか。
・活動をうまく進めるために何か工夫していたことはありますか。
・活動の中で，難しいと思ったのはどんなことですか。
・プラザの中で，何か新しくやってみたいことはありますか。
・企画を考える時に，どんな目線で考えていますか。
・活動の中で，他の学生スタッフと，どのようなやり取りがありましたか。
・「外国語学習経験を語り合おう」に自分が参加していたら，どんな話をしますか。

表 2 がインタビュー協力者の概要である。インタビューは，2023 年 8 月から 2024 年 2 月までに 1 回ずつ実施，インタビュー時間は 46 分～80 分であった。

表 2

インタビュー協力者概要

	できる言語（〇印は母語）	担当地域	TF・TA 従事期間
S	〇中国語，日本語，英語，広東語	中国河南省	2020 年 10 月～現在

C	○中国語，日本語，英語	中国河北省	2021 年 4 月～2023 年 3 月
A	○日本語，英語，中国語，フランス語	カナダ，中国新疆ウイグル自治区	2022 年 4 月～2023 年 8 月
M	○日本語，アラビア語，英語，ハウサ語	アラビア語圏諸国，ガーナ	2022 年 4 月～現在

大学院生スタッフのやりがいと学び

インタビューの質問への回答，企画を進めるうえでの工夫や難しさ，他のスタッフとの関わり，やりがい，学びなどをまとめると，以下のようになる。

（1）多言語多文化への興味の増進
（2）SALC らしいイベントの企画の検討
（3）グループでの企画能力
（4）企画を通した他のスタッフとの交流
（5）母語以外の言語でのコミュニケーションへの不安の減少

それぞれの内容について，インタビュー時に話された概要を次に述べる。

多言語多文化への興味の増進

学部生の時に外国の文化に興味を持っていた C さんは，プラザの企画を通して中国，日本以外の国や地域の文化を他の TA/TF から聞く機会を持ったことにより，大学院生になり忘れてしまっていた学部生時代の気持ちを思い出し嬉しくなった，と話した。

多言語多文化イベントを担当した TA/TF の専攻は全員人文学系で，専門は言語学や教育制度などである。自分の研究に関わる言語・地域についての専門性は高いが，専門外の多言語多文化に触れる機会はそれほど多くはない。多言語多文化イベント企画のアイデアを出すため，他の TA/TF と様々な国の地域や文

化について話す機会は，大学院生が広い視野を持つための学びの場となっていると言える。

SALC らしいイベントの企画の検討

イベントの内容および進行に関する工夫について，企画側が一方的に話すだけはなく参加者も話せるような内容にするための工夫をしたこと，参加者の反応に備えて 2〜3 種類の計画を準備したことを S さん，C さん，M さんが話していた。

このような工夫は，TA/TF が SALC は課外で学びを促進する施設であることを理解し，イベントの企画を続けていくうちに自ら思案して行ったものである。実際に，参加者への事後アンケートの結果では，参加者が積極的に発言できたイベントでの参加者の満足度は相対的に高く，TA/TF の工夫が活かされていると言える。

グループでの企画能力

A さんと M さんにより，初対面で背景の異なるメンバー全員が担当できる内容を詰めていく過程に難しさがあり，話し合いを通してできることを探り，工夫していったことが話された。

前述の通り，各学期 3〜4 名の TA/TF チームが編成されるため，学期はじめは，所属や専門，それぞれの興味関心が異なるメンバーが集まってミーティングを行い企画のためのアイデアを出していく。そのため，多数のアイデアから大きなテーマを設定して全員がその中の一部を担当できるように接点を見つけるために話し合う。また，スケジュールに合わせて内容・時間を現実的なものに絞っていく必要がある。このような過程で，背景の異なるメンバー間で調整を行うグループ企画能力が上ったと言える。

企画を通した他のスタッフとの交流

S さんは，グループで企画をする過程で意見をもらえたこと，それを通して TA/TF 同士の関係性が深まったことが心に残っていると話した。

企画ミーティングでイベントの大きなテーマを設定した後，TA/TF は各自の担当箇所のスライドを作成するが，イベント当日までにチーム内で互いに共有し，面白いところや足りない部分についてコメントをし合う。その過程を通して連帯感が生まれたことは円滑な運営の一助となったが，それだけでなく，一人の作業では気づかなかった言語文化の伝え方や新たな視点に目を向けることができるようになったことが話された。これはイベント運営を通した教育効果であると言える。

母語以外の言語でのコミュニケーションへの不安の減少

コミュニケーション言語について，S さんは，多様な背景を持つ院生スタッフがいることにより，英語で話すことに不安がなくなったことを話している。また，C さんは自分の母語ではない日本語で自分の文化を紹介する機会を得たことで，グループ内の日本語母語話者に相談し，原稿を準備して臨んだ。その結果，日本語でのプレゼンテーション能力が向上し，自信を持てるようになったと感じたことと話した。

プラザ内では，言語ポリシーは明示されておらず，日本語・英語・中国語等，話す相手によって様々な言語が話されているため，TA/TF 同士で互いの言語文化背景がわかると，自然とコードスイッチングが起きる。また，留学生の TA/TF の場合，自分が所属する研究室以外で日本語を使って発表する場面は稀である。このような環境にあるなか，多言語多文化イベントの進行を通して，母語以外の言語を話す不安が軽減されたと言える。

多言語多文化イベントの企画運営を通した学び

本稿では，プラザで実施している多言語多文化学習に関わる支援の概要を紹介し，企画運営に関わる TA/TF へのインタビュー結果を報告した。その結果，多様な言語・文化的背景を持つスタッフ同士が協力することにより，イベント管理能力以外にも，自身の言語文化観への気づきや多言語多文化についての理解を深めるという新たな学びが起きていることが明らかになった。また， 多様な言語・文化的背景を持つスタッフ同士の協働でイベントを企画し進行するた

めの工夫や，母語以外の言語でコミュニケーションをとったり発表したりする経験のように，院生としての，研究や教育の能力の向上につながる学びも得ていることが分かった。SALC を運営する教員として，今後はイベント参加者への調査を行うとともに，多言語多文化の企画運営について検討していきたい。

参考文献

大阪大学（2024）『大阪大学プロフィール』https://www.osaka- u.ac.jp/ja/guide/public-relations/profile/profile2024（2024 年 8 月 30 日閲覧）

Kanduboda, B. P. (2020). From Active Learning to Deep Learning: Supporting Socialization and Autonomous Engagement via SAC Staff Duties. *JASAL Journal, 1(2)*, 129–138. https://jasalorg.com/kanduboda-supporting-socialization/

Thornton, K. (2023). Linguistic Diversity in Self-Access Learning Spaces in Japan: A Growing Role for Languages other than English?. *SiSAL Journal, 14(2)*, 201–231. https://doi.org/10 37237/140206

Hayashi, H, M. and Wolanski, B. (2021). Teaching Assistant-led Study Groups as a Platform for Language Learning: Providing New Opportunities for Student Staff in Kyushu University's Self-Access Learning Center (SALC), *基幹教育紀要*. 7, 131–141.